

# レポート 2013.10.9

## 第3回「盲目の弁護士から見た社会」

国際医療福祉大学大学院

東京青山キャンパス

13S3032・鈴木祐子

先生のお話を、「視覚障害があるということで生活や人生においてどれほどの不利益を被ったか」という点に終始するのだという思い込みがありました。

しかし、語っていただいた内容は、受け身のものではなく自信と気迫に満ちたものでした。怯懦な自分を自覚せざるを得ませんでした。

「ハンディはあった。しかし、人間・人生は不幸ではない」との言葉をうかがい、先生は人生を自分の力で幸福に変えたのだと実感いたしました。

京都大学の司法試験合格のための学習会でのメンバーの考え方、「作られたイデオロギーではなく、学んだ中で生活していくうえで自ら形成していく」について、素晴らしいと先生は、語っておられました。本当に納得いたしました。

先に価値観があるのではなく、その人、あるいは目の前の出来事に真摯に向かい合っていくことで、価値観は形成されるのであるし 人間尊重の思想が定着していくのだと感じました。

残念ながら「~障害者だから」と考えてしまいがちなのは、いろいろな意味で自分の見えているものが見えていくと実感しにくいバリアの存在があるのだからかもしれないと感じました。

「生きていることには意味があり、夢を持つことは生きることなのだ」と、石川県の恩師から導かれたというご体験は、まさに教育とは人と人の出会いなのだ実感いたしました。

教員として学生と関わってきた中で、教えることなどわずかで自分自身のもっているものを気付いてもらうことだと感じておりました。胸にストンと落ちた思いがいたしました。

夢は叶ったら終わりではなく、その後続く努力が大切であることについて、「証拠集めは難しい・信頼関係を築くのは難しい・スピードが大切」という第一線の弁護士であり続けるためにしておられる努力は、流されるままであった私には耳が痛い内容でした。なにものかであり続けることは、安穩としたこれでいいのだという緩みを自分にしてはいけなと感じました。先生は、努力し続けるために、登山・スポーツ観戦など集中して余暇で充電しておられるのだと感じました。

「誇りを人に語れること、社会には偏見はある。しかし、社会は壁だけがあるのではない」という言葉は、あきらめないで自分で何回も立ち上がり、この条件下でできることは何かを考え、こだわり続けた先生だから、見た社会なのだと考えました。努力しないで、何か大きなものに原因を求めあきらめているのは止めようと考えます。

今、私は、病気のためいろいろな活動や参加が制限されていると感じています。

諦めて病気と仲良く折り合いをつけて、平和に暮らそうとも考えましたが、先生の講義に参加させていただいて、挑戦し努力し足掻いてみようかなと勇気を頂いたと思います。

有意義な講義をありがとうございました。